風の群像

上

杉本苑子

Sugimoto Sonoko

日本経済新聞

風の群像

上

杉本苑子

江苏工业学院图书馆
藏
Sugimoto

日本経済新聞社

風の群像 上

一九九七年六月二十三日　一刷

著者……杉本苑子
©Sonoko Sugimoto 1997
発行者……竹内正紀

発行所……日本経済新聞社
東京都千代田区大手町一-九-五　〒一〇〇-六六
電話(〇三)三二七〇-〇二五一　振替〇〇一三〇-七-五五五

印刷・精興社　製本・大口製本

ISBN4-532-17050-8
本書の無断複写複製(コピー)は特定の場合を除き、
著作者・出版社の権利侵害になります。
Printed in Japan

風の群像

◆上

目次

密議……7
落とし種……26
叛旗ひるがえる……41
ろくはら終焉……52
両雄両心……61
底なし盥……77
裏も表もある綸旨……93
河原喧嘩……106
闇討ち、さらに闇討ち……121
引く潮……133
大塔宮最期……145
蟬しぐれ……152
竹ぬすびと……161
勅使、京へ帰る……172

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

吠え声……180
裏切り……196
洛中合戦……209
陸の灯　海の灯……225
迷い蛍……242
荒れ狂う海……250
雨降りしきる……263
勧降使……273
捨てられた者……280
女扇……294
神器問答……305
底流……316
燈明寺縄手……329
四大元空……338
驕児乱舞……351

装幀＝菊地信義

風の群像

上

密　議

通り雨が去ったあと晩春のこの季節にはめずらしく、夕空の一方に淡い虹が出た。
「きれいだなあ」
見上げるまなざしは、どれも若い。
「あの木の下へ行こう。土が乾いている」
だれ言うとなく、いっせいに動き、木蔭の草を敷いて車座になると、それだけでもう、潑溂たる生気があたりに散った。
足利家の当主、高氏が二十九歳。
その弟の直義が、二十七歳……。
彼らの腹心であり、無二の友でもある上杉重能、高師直、高師泰の三人さえ、そろって三十にはまのある青年武将ばかりだった。
「たった今だ。評定所へ早馬が入ってな」
緒太の草履をぬぎちらしてあぐらを組むと、直垂の衿をはだけ、乱暴に扇使いしながら、まだ立ったままの者がいるのもかまわず高氏はせっかちに切り出した。
「早馬？　六波羅の探題からですか？」

「うん。隠岐に流されていた先帝がこっそり島脱けされたとの、北条越後守どのよりの急報なのだ」
「後醍醐院が？　いつです？　それは……」
「二月二十四日の夜陰だそうだ。おどろいたよ、おれも……。かねがね気性のはげしいお方とは聞いていたが、警固の目をぬすんで千種忠顕とかいう公家と二人、イカ釣り舟に身を潜め、配所を脱出されたというのだからな」
ほがらかな大声である。体格も声に劣らずたくましい。眉が濃く、鼻梁が高く、海で泳ぐのが好きなせいか、日灼けした首筋からいつも健康そうな潮の香を発散させている。
性格はずぼらだし、飾りけがない。立ち居も荒っぽいが、そんな欠点を救って余りあるのは高氏の双眸の、澄みの深さだった。
家系の気品と、人柄の善良さがにじみ出て、怒っていてさえ、なぜか憎めない。まして笑うと、対する者を魅了せずにおかない人なつこい笑みが、その目いっぱいにあふれるのである。
「それにしても、すごい胆力ですなあ」
歎息まじりに、上杉重能が寸評した。
「雲上人の御身をもって、牢舎を脱け出すさえ容易でないのに、暗夜、風浪の中へ小舟を漕ぎ出し、討手の追跡を逃げ切るとは……」
「古今まれに見る剛毅の帝だ。おそらく大塔宮、もしくは例の楠木あたりが手引きしたにちがいないがね」
肩をすくめる高氏に、だれもが苦笑まじりのうなずきを返した。
大塔宮と楠木正成――。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

この二つの名を、鎌倉武士で知らぬ者は、いまやいない。それは、おととし、
「後醍醐天皇、ご謀叛あそばさる」
との報に、数万の幕軍が急ぎ、上洛した折りのことである。
後醍醐帝は笠置の城に拠られたが、ちっぽけなこの城のあるじが河内の土豪楠木正成。吉野にこもって寄せ手を迎え討った将が、大塔宮護良親王だったのだ。
「楠木？　いったいなに者だね？　それは……」
はじめ鎌倉勢は顔を見合せた。
名もない田舎郷士……。一方の大塔宮も今上の第二皇子とはいえ、つい先ごろまで比叡山の座主として、経文の読誦にあけくれていた還俗法師ではないか。
「たかが知れておるわ」
「ひと揉みに、揉みつぶしてくれよう」
と、呑んでかかったのが誤りだった。
楠木正成の作戦の妙と大塔宮の勇武に翻弄され、幕軍はただ、いたずらに、彼らの手柄を日本中に拡めてしまったのだ。
足利一門も、このとき北条方の一翼として上洛したが、伊賀方面の守備に廻されたため、楠木の鋭鋒なるものを味わわずに終った。鎌倉に凱旋後、
「いやあ、さんざんな目にあったよ。高氏どのは笠置攻めにも吉野攻めにも加わらずにすんで、運がよかったなあ」
戦友たちの口から苦戦のかずかずを聞かされ、ひそかに二人の名を、

「おそるべき敵」
として、脳裏に刻みつけたにすぎない。

後醍醐先帝！
思えばこれほど、鎌倉幕府を手こずらせ、今なお悩ませつづけている名前は、他にあるまい。
おととしの、笠置挙兵――。大局的に見ればそれは、楠木らの勇戦にもかかわらず後醍醐院側の敗北に帰し、その結果、隠岐の島への配流となったわけなのだが、じつは笠置での旗揚げ以前にも、院は怪しげな策動をおりおり起こしては、天下をさわがせ、人心を不安におとしいれていた危険きわまりない爆発物だったのである。
いったい、この人は、帝系から見てどのような立場にいるお方なのか？　たびたび北条政権の転覆をくわだてておられるけれども、その目的は何なのか？
さぐってみると、根は深い。三代前にまでさかのぼらなければならないのだ。
後醍醐先帝の曽祖父に、後嵯峨院と諡された帝王がおられた。
后腹の、男児が二人……。
この兄弟のお子のうち、なぜか後嵯峨院は弟息子を愛され、父のゆずりを受けていったんは帝位にのぼった兄皇子――後深草帝が、わずか十七歳に達したとき、
「もはや、そなたは隠居せよ」
と、むりやり退位させて、弟息子を帝座につけてしまったのである。
この新帝を、亀山天皇という。

いかに父親に権威があるとはいえ、ずいぶん自分勝手なやり方だが、まだ少年にすぎない後深草帝には、あらがう力はなかった。

弟に取ってかわられ、泣く泣く上皇の座にしりぞいたが、これだけのことならまだ、我慢できた。

「あんまりだ。いかになんでも父君のなさりかた、不公平すぎる」

と後深草上皇が歯がみしてくやしがったのは、次の帝位を約束する皇太子の地位に亀山天皇のお子を据えて、ぽっくり、後嵯峨院が他界してしまったことだった。

兄であり、嫡男の系列でいながら、後深草上皇のお子たちははじき出された。永遠に、帝位とは無縁な立場に追いやられたのだ。

「でも、やむをえますまい。亡き父上が私に嘱目し、私の子孫に代々、帝位を継がせようとして、計らわれたことなのですから……」

得意然とうそぶく亀山天皇にひきかえて、後深草上皇の失意ははなはだしかった。

「無念だ。この先、ながらえて、弟の栄えを見る苦しさには耐えられぬ。私は出家する。いや、自裁するぞ」

とまで悶えるのを、見かねたのだろう、

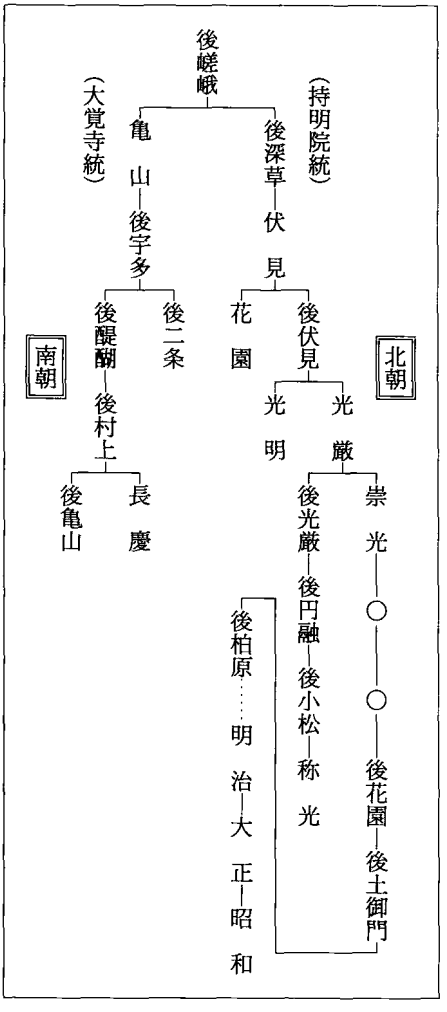
「ご心中、お察しはいたしますが、上皇のご身分におわすお方が、自害するなどと口走られるのは、おだやかでありませぬ。なにとぞお気をおしずめあそばされませ」

と鎌倉幕府が調停に立ち、いささかの波瀾は見たものの、ようやく双方をなだめて、

「ご兄弟のご子孫、交替で、帝位を踏む」

との約束を取り交すまでに漕ぎつけたのである。以来、

天皇両統系統図



「兄、後深草院の流れを、持明院統」

「弟、亀山院の流れを、大覚寺統」

と一般に、呼びならわすことになったのだが、約定通り、なかなかすんなりと事は運ばなかった。混乱は、思いがけないほど早く襲いかかってきたのであった。

むりもない。

人の家系は末に行くほど、族葉がふえて拡がるものなのである。皇統といえども例外ではなかった。大家父長としての恣意を、思うがままに振るったあの、後嵯峨院からかぞえて、わずか三代目、曽

孫の代に至ると、持明院統も大覚寺統も、さらに兄の系列と弟の系列の二派に分裂……。

たった一つしかない帝位を、四派で争うという複雑な様相を呈しはじめた。

しかし持明院統の天皇たちは、どなたもが、おとなしかった。おっとりしておられた。

両統のあいだに交された迭立の約束をきちんと守り、きまりの在位期間がすぎると、帝位を大覚寺統にお渡しになったのに、その大覚寺統の中から一人、したたかな帝王が出現した。後醍醐天皇である。

この人は、弟宮の系列である大覚寺統の、さらに弟の流れ……。つまり四派のうちでも最末端に属する派から立った天皇だった。

三代前のいにしえ、後嵯峨院という一人の父親の、

「長男よりも、弟息子のほうがかわいい」

という個人的な、片寄った愛が、皇統の清冽を濁さず、帝位が正しく正嫡に受けつがれつづけてきていたら、後醍醐天皇の出番など、到底、ありえなかったろう。

おそらく一生涯、冷やめし食いの一王子として埋もれるはずだった。そんな枝葉の、先の先にいた人が、ともかくも帝座につけたのは、まったくの時運であり、皇統の乱れがもたらした僥倖だったのに、即位できた仕合せを感謝するどころか、

「はからずも回ってきたこの折りを逃がさず、万乗の位を我が手一つにつかみ取ろう」

と奮い立ったところに、後醍醐帝という人のなみなみならぬ覇気がうかがえるのである。

「それには、どうすべきか？」

答はかんたんだ。持明院統の宮たちだけなら赤児の手をねじるようなものだが、うるさいのは北条

執權家、つまり鎌倉幕府の介入だった。
「両統、かわるがわる帝位を踏もうとのお約束は、お守りあそばすべきです」
そう諫止するにきまっている。
「持明院統を押しのけ、迭立の取りきめなど蹴散らして、向後、永久に、自分と自分の子孫の頭上にのみ、帝冠を戴せつづけるためには、まず、目の上の瘤をのぞかねばならぬ」
幕府、打倒——。
後醍醐帝の目的がそこに絞りこまれたのは、当然な成りゆきといえよう。
そのころ、北条氏は元寇の出血が尾を曳いて、財政的に疲れきっていた。
元寇——。いうまでもなくモンゴルの大兵団による日本への、二度にわたる侵攻である。
北九州の博多湾に攻めよせてきたおびただしい戦艦が、たまたま台風に遭って沈没しなかったら、蒙古兵の上陸によってどれほどの酸鼻を現出したかわからない。
いわば、この国はじまって以来の危機に直面しながら、鎌倉幕府は総力をふりしぼって困難に対処し、国政担当者としての責任をまっとうしたのだ。
ただし、恩賞への不平はくすぶった。国内での合戦なら、敵からぶんどった領地を味方の将たちに分け与えることができるが、モンゴルが相手では支出ばかりで、得るものがない。奮戦した北九州の御家人たちは、
「頂くものが頂けぬありさまでは、討死した血族郎党も、浮かばれませぬ」
と、はるばる鎌倉へくだってまで、愁訴をこころみた。
むろん、懸命になって幕府は彼らの功にこたえようと努力した。しかし公領を割いても限度がある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.